レッジョ・エミリア・アプローチ入門

――世界の最先端を行く幼児教育から学ぶ――

Learning Through Observation and Documentation:
Lessons from the world's most child-focused program (The Reggio Emilia Approach)

講師：Sydney Gurewitz Clemens
通訳：加藤正一（フリーランス通訳者）
コーディネーター：山本理絵（教育福祉学部）

本稿は、愛知県立大学生涯発達研究所・愛知県立大学地域連携センター共催「2013年度保育・幼児教育セミナー」として2014年2月16日㈰に愛知県立大学（学術交流センター）で開催した、講演とワークショップの内容である。開催にあたっては、フィンバー・バーク氏（ディスカバリー・インターナショナルスクール校長）、白石淑江氏（愛知淑徳大学教授）に協力をいただいた。

講師紹介

シドニー・グレウィッツ・クレメンスさんは、現在幼児教育・保育において世界中で注目されているレッジョ・エミリアのアプローチに詳しい。アメリカで幼児教育教師の経験があり、大学で講師も勤め退職後、現在は諸外国で招待されて講演・ワークショップ等を行っている。NAEYC（National Association for the Education of Young Children）でも活躍されている。

ホームページ：http://www.eceteacher.org/index.htm

著書：

Seeing Young Children With New Eyes What we've learned from Reggio Emilia about children and ourselves, 2013.

Pay Attention to the Children: Lessons for Teachers and Parents from Sylvia Ashton-Warner, 1996.

The Sun's Not Broken, A Cloud's Just in the Way: On Child-Centered Teaching, 1984.

Centering on the Children, 1985.

はじめに

今回、このように名古屋にお迎えいただきまして、大変感謝しております。

今日、皆さんにお話しするのは、レッジョ・エミリアというイタリアの小さなまちでつくられた教育法であります。このレッジョ・エミリアというのは、もともとまちの名前なんですね。多くの方がレッジョ・エミリアにおける幼児教育法というのは世界で一番すぐれたものだというふうに考えています。

レッジョ・エミリア学校の教育法を開発してきた人たちというのは、子どもたちを教育するにはどうしたら一番いいのか、また、子どもたちを教える先生方のスキルを伸ばすにはどうしたら一番いいのかというのを非常に熱心にこれまで学んで研究してきたわけであります。

レッジョ・エミリアというまちだと言いましたが、我々は、残念ながら、そのまちに住んでいるのではないわけです。でも、このレッジョ・エミ

リアの考え方を使おうとしているわけなんですね。これをうまくやるにはどうやったらいいのか、我々が子どもたちを教えるときに、あるいは我々の先生方のスキルを伸ばすときに、どうやったらうまく使えるかということなんですが、これに関して、ハワード・ガードナーという方が、かつてこんなふうに言っています。レッジョ・エミリアのスキル、あるいはやり方を別の国、別の環境で使おうとすれば、3 つ大切なことがあると。

まず、1 番目に大切なことは、レッジョ・エミリアというやり方を一から自分たちのやり方として捉え直すことが重要だということ。そして、2 つ目として、そうするときに、まず自分たちの文化、自分たちの価値観ということをよく知ることが大切だと。そして、その捉え直したやり方というものをイタリア人たちがレッジョ・エミリアを使ったやり方と比較してみることだと。

今回、私は、ヨーロッパ発のこの考え方を学んだアメリカ人としてアジアの日本に来て、皆様とそれをシェアしようとしているわけなんですね。この考え方、レッジョ・エミリアのやり方というのは、非常に大きな距離を旅して、そして、旅した先に根づいてきたわけなんです。それが根づく際には多くの方々を驚かすようなこともありました。新しい考え方がうまく使えるようになるためには、もちろんその新しいやり方が新しい環境の中でうまく受け入れられて、うまく適応していくことが必要なんです。

我々は先生として毎日ユウコさんとか、あるいはサチオ君を教えているわけですよね。ユウコさんやサチオ君を教える際には、もちろん彼らのお父さんやお母さんというのも存在しているわけで、こうした人たちみんなが自分たちを先生として信頼してくれるようにする必要があるわけなんです。そうするために、このレッジョ・エミリアというやり方をうまく使っていく必要があるわけなんですね。ただ、うまく使うに当たっては、レッジョ・エミリアの中のアイデアを我々が勝手にねじ曲げたりしてしまってはもちろんいけないわけです。

私のこれまでの経験に基づいて、私自身としては、レッジョ・エミリアのイタリアの人たちから私が学んだやり方というのは、どんな文化においても、どんな社会においても、非常に役に立つものだというふうに信じております。ただ、もう一つ、つけ加えておきたいのは、このやり方を学ぶことで自分たちが属している文化というものもうまく知ることができるし、うまく適応するものなんですね。

これから、レッジョ・エミリアがどういうふうに開発されたのか、簡単にイタリアの人たちが通常物語るようなやり方でご紹介したいと思います。ただ、簡単にご紹介するといっても、私がカバーできるのは多分ほんとうの背景の 1 %にも過ぎないと思います。でも、できるだけ皆さんが今後の皆さんの活動の中で実地に使えるようなアイデアを盛り込みながら説明します。それから、もう一つ、皆さんがレッジョ・エミリアに関してできるだけ大きな概要というものを取り込むことができるように説明していきたいと思います。

レッジョの物語

第 2 次世界大戦の戦火がようやく鎮まった後、レッジョ・エミリアの女性たちが瓦れきをかき分けて自分たちの子どもたちのために学校をつくってあげたいと思いました。この女性たちは、まだレッジョ・エミリアの周辺に残っていた戦争の当時の戦車であるとか、あるいはほかの武器等々を集めて、そうしたものを売って、そして、自分たちの学校を建てるための手段を集めてきたわけなんです。彼らの目指していたことは子どもたちのためのすばらしい学校をつくること、そして、その学校において子どもたちを教育して平和な世界になるように、あるいは、自分たちが大戦の間に耐え忍んできたようなひどい状況が二度と起こらないようにする、そうしたことが目的だったんです。

女性たちがこうした活動を始めたまちのそばに25歳になるローリス・マラグッツィという学生が住んでいました。彼は教育に長年携わってきた方で、ジョン・デューイなども非常によく読んで知っていたわけなんです。こういうふうに教育学というものを彼は専攻していたんですが、戦争によってそのキャリアはしばらくの間、途絶えていました。戦争が終わった後、女性たちが学校をつくり始めたという話を聞いて自分もそこに行ってみたくなって、そこで自転車に乗ってレッジョ・エミリアに行ったわけであります。それ以来、彼はこのレッジョ・エミリアの教育法に携わり、1945年から亡くなる1994年までずっと携わっていたわけなんです。

私は、非常に幸運なことに、1992年にレッジョ・エミリアに行きまして、その際に2回マラグッツィ先生に会ってお話を聞いております。彼らが最初に建てた学校でありますけれども、これは、当初の形式では子どもさんの親たちが先生として教える1つの組合というような形式をとっていました。その後、この学校というのは数を増やしていって、6歳以下の子どもたちを教える学校として広まっていったわけなんです。1960年代になりますと、政府からの助成金も受けることができるようになりました。今回の話の中では、マラグッツィ先生の話されたことを幾つか、引用して皆さんにもお伝えします。

マラグッツィさんがまずおっしゃったこととして、次のような言葉がありました。すなわち、我々の仕事というのは、子どもたちの創造性、クリエーティビティーを育てるという、そういう仕事であって、彼らが自分自身で高い山をできるだけ高く登っていけるようにサポートする、これが自分たちの仕事だと、それ以上のことは誰にもできないだろうと。

今回、このレクチャーの中で私は皆さんに多くのことをお願いしたいと思います。それは、まず、今日ここで私が講義している、私の非常に入れ込んだ、レッジョ・エミリアの教育法を信頼している様子というのを理解してほしいということです。そして、私の考えを追ってきてください。そして、それに基づいて自分自身の考え方を変えるということもぜひ努めてみてください。特に皆さんにお願いしたいのは、子どもについての皆さんの見方や考え方、皆さんが持っている子ども像というものを変えていただきたいと思います。変化を起こす、自分の考え方を変えるというのは非常に大変なことだと思います。とりわけ変化、変えるというのが表面的なものではなくて、深く変えていくということだとすると、これは時間がかかるものだと思います。新しいアイデアというものが自分の中で芽生えてくるのも時間がかかるものだし、あるいは、新しいアイデアというものが芽生えてきても、それにほんとうに自分がうまくつき合えるように自分が成長していくのにも時間がかかるものだと思います。

そういう意味でいいますと、皆さんが今後変化を経験していく中で、自分がずっと一緒に皆さんといられないのはとても残念だと感じます。けれども、ぜひ自分の今持っている考え方、子ども像を変えるのがいかに重要なのかよく考えてみて、そして今後、その変化を何とかなし遂げてほしいと思います。そしてそのためには、まず皆さん同士で協力していくことが重要だと思います。皆さんが持っている現在の考え方を変えていくにはどうしたらいいのか、お互いに話し合って、その変化というものを何とか実現していってほしいと思います。まさにそれをレッジョ・エミリアの人たちもやっていると私は思うんです。彼らのことを私はレッジャーニと呼んでいますが、彼らは頻繁に自分たちの仲間内で集まって、そして、相談し合って自分たちの考え方を常に新たなものに改めていくと、そういうことをしているんですね。

レッジョ・エミリアの中では、子どもと、そして先生と、それから両親・親御さん、この3つが重要な要素だと考えていて、その中でも特に重要なのが、この3者がお互いに協力し合っている関係だと言っています。なお、環境については、両親、先生に次ぐ3つ目の先生だというふうに捉え

ています。

子どものイメージ

レッジョ・エミリアを学ぶということは、幼児教育全体を学ぶということなんです。「プロジェクト」というのは、確かにレッジョ・エミリアの中では非常に重要であって、また、すばらしい 1 つのポイントではあるわけなんですね。ただ、プロジェクトというのがレッジョ・エミリアの全てではありません。これに関しては、また後ほどもお話をしますけれども、プロジェクトということ以外にもレッジョ・エミリアにはたくさんの要素があるわけなんですね。

これまでたくさんの国を訪問して、そして、レッジョ・エミリアという看板を掲げているような学校も見てまいりました。ただ、そうした学校がレッジョ・エミリアというのを本来の姿で捉えているかというと、そうでもない。例えば、プロジェクトなりなんなり、レッジョ・エミリアの有名な幾つかの特徴の少しだけを取り込んで、そして、レッジョ・エミリアと謳っているところもたくさんあるわけなんです。

ですから、皆さんには、そのようなことはしていただきたくないというふうに考えています。ここでは、そんなふうにレッジョ・エミリアを過小評価するのではなくて、プロジェクトということから入るのではなくて、別の入り方をしてみたいと思います。これからお話ししていきますけれども、別の側面から入っていって、プロジェクトについては自然にそれが話題に上ってきて、理解していただけると思います。

レッジョ・エミリアというのは、まず、何が大事かというと、大人たちが子どもたちの言うことに聞き耳を立てるということなんです。彼らの持っているすばらしいアイデアであるとか、彼らの理論というものをよく聞いて理解するんですね。彼らの言っていること、あるいは、していることを、思っていることを表現し、そして、彼らが自分でそれが正しい考え方かどうかをテストし、そして、相手に伝えていく、そうした彼らのやり方を大人が補佐するんです。これがレッジョ・エミリアのやり方なんですね。

こうしたことをするときに、彼らのやっている作業や話している内容をドキュメンテーション、すなわち記録していくわけなんです。記録した内容に基づいてお互いに協力し合いながら、先生同士、あるいは先生と子どもさんの間で協力しながらプロジェクトが立ち上がっていくことになりますけれども、これに関して、またもう少し話していきたいと思います。

子どもたちが作業を行う、あるいは話し合う内容というものをドキュメントに残していきます。こうしたドキュメンテーション、記録取りということをすると、次第に皆さん、自然にプロジェクトというものが立ち上げられるようになっていきます。それは、プロジェクトというのが最初にあるのじゃないと言った私の意図なんですけれども、マラグッツィ先生がおっしゃった言い方をかりると、こんなふうに彼は言っています。川というのがあって、我々の経験というのが川だとすると、例えば、教える側と学ぶ側というのは、川を挟んで向こうの岸とこっちの岸にお互いに立って川について学ぶというような、そういうやり方ではないんですね、レッジョ・エミリアのやり方というのは。そうではなくて、教える側と子どもが一緒に船に乗り込んで、一緒に経験の川を渡っていくというか、下っていくわけですね。川について学んでいく、そうしたやり方がレッジョ・エミリアのやり方で、これはまたプロジェクトというやり方であると。

具体的に、ドキュメンテーション、記録取りというのはどういうふうにやるのかを 4 枚の写真をお見せしながら説明したいと思います。この 4 枚の写真というのは 5 分間で撮られた写真でありますけれども、大体25年ぐらい前に撮られたものですね。

3 枚目の写真を見た後に、皆さんに、4 枚目の写真にはどんな画面が写っているのか、どんな状

況が写っているのか、各自で予想していただきます。

では、まず、1枚目の写真ですけれども、12か月の赤ちゃんですね。ある製品のカタログを目の前で見ていますね。女性が隣にいますけれども、母親ではなくて保育者です。まず、聞きたいんですが、彼女が、もちろん彼女はまだ日本語も英語もしゃべれないし、イタリア語もおぼつかないと思いますけれども、もし、この保育者に何か語りかけているとしたら、何て言っていると思いますか。

（参加者から）

「この時計は好きですかと言っている。」

「これが大好きだ、これが一番いいと言っているんじゃないか。」

「格好いい時計だね。」

「これ、好き」というのはどうですか。

次の写真（2枚目）を見せましょう。（子どもが保育者の腕時計をさわっている写真）

今、年齢の若い皆さんは知らないかもしれないんですけれども、腕時計というのは昔は音がするものだったんですね、チクタクチクタクと。

先生は今、何て言っていますか。

これはどう言っているのかな。「私も持っているわ」って言っているのかな。「見てごらん」って言っているのかもしれないですね。「見てごらん、私も1個、持っているよ」って。

次の写真（3枚目）では、これはどんな事態が生じているんでしょう。（腕時計を子どもの耳に当てている写真）

「何か聞こえますか」と言っているのかな。

「私の時計は音がするでしょう」と言っているのかな。

いいですか。皆さんも賢いと思いますけれども、この赤ちゃんもとても賢いんですね。この子が今こうやって、4枚目がどんな写真なのかを、さっき言ったように予測してほしいんですね。予測した内容を書いてください。書いたら、どなたかとペアになって、自分が書いた内容をシェアしてください。

（グループ討論）

すごくよい答えが出たので、ちょっと繰り返しますね。

これは、赤ちゃんがカタログに耳を寄せて時計の音を聞こうとするのではないかという答えですね。どうしてそんなことをすると思いますか。赤ちゃんがどうしてわざわざカタログに耳を近づけて聞くなんていう行為をしようとするかな。

皆さんの中には、きちんと答えられなかった方もいらっしゃるかもしれませんよね。例えば、「この赤ちゃんが4枚目の写真では時計を口に入れようとしているのではないか」とか、そういう答えもあったかなとは思います。そういう方にここで気づいていただきたいのは、この赤ちゃんというのは、非常に有能といいますか、賢い存在なんですね。その点をよく理解していただきたいと思います。時によると、我々はどんどん過小評価してしまって、そんなに子どもというのは知恵がないというふうに思ってしまいがちなのですが、そうではないんですね。レッジョ・エミリアという教育法のすごいところは、赤ちゃんという存在を非常に能力の高い、そして賢い存在というふうにみなしている点なんですね。将来頭がよくなる存在とか、そういうことじゃないんです。赤ちゃんというのは非常に能力の備わった存在なのだという見方なんですね。

先ほどのカタログに耳を近づけて聞く姿勢をとるだろうという答えは理にかなってはいるけれども、なかなかその答えにたどり着かない場合が多いんですね。だから、あんまり正しく答えてくれたので、ほんとうにびっくりしています。

どのような学校をつくるか～子どもの力を伸ばす方法

次に皆さんにお聞きしたいのですが、このよう

にそもそも知恵がある子どもたちに学校をつくるとしたら、どんな学校を皆さんだったら建てますか。

この子どもさんはローラという名前ですね。イタリア語だったらラウラでしょうか。彼女は自分自身の考え、アイデアというのをもう明らかに持っているわけなんですよね。レッジョ・エミリアのやり方というのは、こうした彼女が持っているアイデア、そういう考える姿勢というのをさらに伸ばしていく、後押ししていくことなんですね。型に入れた教え方をするというのとは全く反対の考え方なんです。では、どうやったら彼女がそういう力をさらに伸ばしていけるようにできるのか、どんな道具立てを用意してあげればいいのかというのがレッジョ・エミリアのレッジャーニたちが今までずっと考えてきたこと、そして現在も考えていることなんですね。どういうふうにサポートしたら彼女が成長し、そして力をさらに伸ばしていくことができるのかということ、そこの重要な1つの要素が子どもの言うことをよく聞いて、彼らにリーダー役になってもらって、先導役になってもらって、それを大人たちが学んでいくという姿勢なんですね。それが大切だと彼らは考えています。そうすることで、子どもたちというのは自分の意図というのをきちんと表現し、示し、考えていくことができるようになるというふうに考えているんです。だから、大人の考えで子どもを染め上げるとか、あるいは型にはめるというやり方はしない、そういうふうに考えています。

それでは、ここで、どんな学校が子どもにとって一番いいのか、どんな環境をつくったらよいのか、話し合ってみてください。

（グループ討論　発表、コメント省略）

これは、私が知っているある先生が、やっぱり皆さんと同じように、ローラにとってふさわしい学校はどんな学校だろうと考えて、そして、出した一つの結論なんです。

子どもというのはすばらしいアイデアを持っています。大きな壮大なアイデアだったり、あるいは非常に複雑なアイデアも持っているんですね。だから、我々は先生として、子どもたちにそうしたアイデアをぜひとも持続的に持ってもらって、それが実際に実現できるようにしていきたいと、そういうサポートをしたいと考えています。

それから、子どもたちがある何かをなし遂げようと思って、自分たちで作業して何かをつくったとします。それで、自分でつくり出したものに対してすごく自信を持って、また、プライドを持ったときに、子どもたちの周りにいる大人たちがすべきことは何かと考えてみましょう。大人たちは、空虚な褒め言葉で子どもを褒めるとか、その場を濁すとか、そういうことはよくないと思うんですね。グッドジョブ、よくできたねなんていう言葉がきちんと使われていないことがあるというか、無駄に使われていることがあると思うんですね。

何で子どもにグッドジョブと言っちゃいけないのかという質問に対して私が言ったのは、じゃ、あなたはほんとうに自分ですばらしいと自分を誇らしく感じるのはどんなときですか、誰かほかの人があなたにすごいねとか、やったねとか、よくやったねって言ってくれたときなんですかって聞いたら、彼女はちょっと考えて、いや、そうじゃなくて、やっぱりよくやったと自分で言えるときなんだと言っていました。だから、それが大事なんだと思うんですね。子どもたちも、自分の内側から自分のやったことを誇らしいと思えるようにしてあげる、それが我々の仕事だと思います。

日本では以前、どちらかというと、子どもに対して褒めるのではなくて、うまくできていなかった点を指摘する、ここがだめだねとか、うまくできていないねという、そういう言い方で批評する姿勢が多かったそうですね。だから、それに対してそういうやり方はよくないということで褒めるということが始まったんだというふうに聞いています。それは確かに褒めたほうが子どもの作品を否定するよりはいいとは思うんですが、ただ、一

番いいのは、そうではなくて、子どもが自分の中で自分を誇らしいと、自分のやったことを誇らしいとほんとうに思えるようにすることだと思います。

もちろん、子どもというのは自分を見ていてもらいたいと思っているし、自分の言うこと、自分の意見などをぜひ周りの大人にも聞いてほしいと思っています。それは原則として全く正しいと思うんですね。もし、あなたが子どもに対してグッドジョブというふうに言うとしたら、それは、あなたは子どものやったことを見て、それに対して対応してそう言っているんですね。あるいは、子どもの言ったことを聞いて、そういうふうに答えるわけなんですね。

でも、そういうかわりに、こんなことも言うことができると思うんです。子どもが皆さんに絵を見せたとしましょう。そうしたら、その絵を見てグッドジョブというのではなくて、君はこの絵にほんとうに長く取り組んでいて黙っていたよねと。どんなことを考えながらやっていたんだろうかというふうに聞いてみる。あなたはほんとうにこういうふうに作品をつくりたかったのと、思ったとおりにできたというふうに聞いていくといいと思うんですね。

計測プロジェクト～問題化する

最初のプロジェクトの話をします。これは算数にかかわるプロジェクトなんですが、このプロジェクトの中では、まず最初に、子どもたちは今自分たちの教室にある机と同じ机がもう一つ欲しいと思ったんですね。それがきっかけでした。

これを聞いた教師たちはどうしたかというと、このあたりでちょっと考えてもらおうと思ったんですね。考えてもらうにはどうしたらいいのか、彼らが思いついたアイデアは、出入りしている大工さんに、こういうふうに子どもに問いかけるように言ったんです。「僕は、君たちが欲しがっているテーブルをつくれるよ。だけど、まず、寸法を教えてくれないかね。」

これを受けて子どもたちがやったのはどういうことかというと、まさに人類が歴史の中で測定ということで築き上げた1つの体系を自分たちでもう一度やり直すということだったんですね。測定するということを一から考えたんです。

そのプロジェクトのかなり後半で物差しが出てきたんですが、最初はこうじゃなかったんです。最初、子どもたちが思いついたのは、ある子どもの靴を使うということだったんですね。ただ、やっぱり靴は履いていたいし、それに、家にも履いて帰らなければいけないので、靴をいつも定規というか、物差しに使っていると不都合が生じるんですね。

もう一つは、この教室には、以前から物差しはあったんです。先生方は、この物差しの使い方というのを子どもたちに以前にも教えているんです。ところが、子どもたちは使わなかった。それは、つまり、物差しの使い方は学んだけれども、その学びというか、深い理解ではなかったんです。だから、このときに物差しを使おうという発想にならなかったんですね。

それで、また、靴では不都合があるので、それぞれ自分たちで物差しをつくることにしたんですね。しかし、不都合なことに、それらに統一性がなかった。だから、自分たちでそれぞれはかった結果が異なってしまう。だから、これではいけないと。

ここでわかるのは、彼らが行おうとしたことには1点、欠けているところがあったんですよね。つまりきちんとした測定、まとまった標準的な測定にはならなかったわけです。だけれども、彼らも考えていたことは確かに考えていたんです。しかも、ただ単に考えていたんじゃなくて、ものすごく考えていたんですね。これは、靴を使って計測をしてできた結果なんです。英語ではこのぐらいの長さを1フットといっているから、この子たちのこの考え方、靴を使うというのはまさに正しいというか、適正だったんですね、ある意味で。

このプロジェクトは、実は靴を使った測定結果と、それから、物差しを使ったものと、両方入っ

ているのです。これは、5歳の子がやったんですね。この学校は5歳までのフリースクールで、6歳児はまた上の学校に行くんですが、こういうふうにプロジェクトをした。

これはプロジェクトの結末なんですが、子どもたちが大工さんに書いた手紙を英語にしたものを今読んでいましたよね。大工さんに宛てて、随分会っていないけれども一体全体どうしているんだと。このテーブルだけれども、僕は頑張って寸法を書いたんだぞと。この寸法を書くのにはすごく骨が折れたけれども、長い時間がかかったけれど、できたんだぞと、教える時間はないけどねと。それで、この寸法は全部正確だから、きちんとやってねと。木材は多く使ってねと、色の指定もありましたけれども。間違いをしないように十分注意してやってくれよと、そういうような情報ですね。ぜひ頑張ってやってねと、あんまり急がないで時間はかけてねというふうに言っています。こういうふうな手紙を書いて、ディアーナスクールというふうにちゃんと住所や電話番号も書いて、これを大工さんに渡しました。

子どもの100の言葉

子どもというのは、こういう言語だけではなくて、もっとたくさんの言葉を身につけるべきだということを考えて、レッジョ・エミリアでは、言葉というのはただ単にこういう音声の言語だけではなくて、例えば、絵を描くであるとか、あるいは粘土細工をつくるとか、そういう視覚に訴える言葉もありだと思うし、あるいは、歌を歌うとか、音楽、ダンスなどもあり得るわけですよね。子どもは、それぞれ1つ以上の複数の言葉を身につけるべきだとレッジョ・エミリアでは考えています。このレッジョ・エミリアを開始した先生も、子どもには100の言葉があるというふうに言っています。絶対に子どもたちが複数のものを身につけるようにというふうに伝えていますね。

それでは、100の言葉というマラグッツィの詩がありますので、それを読みますね。英語もあるんですが、英語は見ていただいて日本語のほうを読みますと、

子どもには
100通りある。
子どもには
100の言葉
100の手
100の考え
100の考え方
遊び方や話し方
100いつでも100の
聞き方
驚き方、愛し方
歌ったり、理解するのに
100の喜び
発見するのに
100の世界
発明するのに
100の世界
夢を見るのに
100の世界がある。
子どもには
100の言葉がある。
（それからもっともっともっと）
けれど99は奪われる。
学校や文化が
頭と体をばらばらにする。
そして、子どもに言う。
手を使わずに考えなさい
頭を使わずにやりなさい
話さずに聞きなさい
ふざけずに理解しなさい
愛したり驚いたりは
復活祭とクリスマスだけ。
そして、子どもに言う
目の前にある世界を発見しなさい。
そして100のうち
99を奪ってしまう。
そして子どもに言う

遊びと仕事
現実と空想
科学と想像
空と大地
道理と夢は
一緒にはならない
ものだと。

つまり
100なんかないと言う。
子どもは言う
でも、100はある。　（田辺敬子訳）

100の言葉というもの、これが何を意味しているのかということですが、ここで少し説明を加えますと、このレッジョ・エミリアでは、ある状況に対する対策というか、解決を考えるのに何か形式なんていうものはないと、こうやったらいいんだというように決まり切ったやり方というのはないと考えています。そうではなくて、どんな状況であれ、そのときのその場での特別な事情、コンテクスト、文脈に合わせて自分で考えて対応すべきだというふうに考えています。ですから、これはどうするというような質問に対しては、レッジョ・エミリア流の答え方というのは、場合によると、状況によるという、そういう答えであります。

群衆プロジェクト～再考（Revisiting）

ここでまた、もう一つ、プロジェクトの具体例を示したいと思います。

これはクラウドプロジェクト、群集プロジェクトというふうに呼ばれています。どんな状況だったのか説明しますと、ちょうど夏休みが明けて子どもたちがプレスクールに戻ってきます。それで、夏なので、先生たちの考え方は今日は子どもたちを連れて海岸に行こうかと。そこでシャベルを持っていって、それから、貝掘りなんかをしてというようなことを考えていたわけなんですね。ただ、もちろんそれを勝手に決めるのではなくて、子どもたちが来てからみんなでディスカッションをするわけなんです、何をしようかなと。ですから、先ほど今日の出だしのところでプロジェクトから始めるのはよくないと言いましたけれども、要するに、先生方で勝手に決めてしまって、プロジェクトということをやることだけを目的に考えてはいけないんですね。そうじゃなくて、子どもたちとまずディスカッションをするわけです。そうしたら、そのディスカッションの中で、夏休みの経験に関して話していたんですが、その中で子どもの興味を一番ひいたのが群集だということがわかったんです、人の集まりですよね。

それで、このとき、どんなやり方でこのプロジェクトをしたかということなんですが、このプロジェクトに参加していたのは全部で8名、4名の男の子と4名の女の子でした。まず、先生とディスカッションをしたときに、全体を男の子のグループと女の子のグループに分けて、時間も別にして、それぞれでミーティングを行ってディスカッションをしたんですね。何で男女に分けたかというと、エネルギーバランスが同じぐらいになるようにバランスをとるためなんですね。例えば、宇宙旅行なんていうプロジェクトだったとしましょう。そのプロジェクトでみんなで集まって話し合いをすると、誰がそのディスカッションを支配してしまうと思いますか。誰でしょう。宇宙に関して話をするときには男の子でしょうか、女の子でしょうか。

（参加者から：　ボーイズ。）

赤ちゃんに関するプロジェクトだったらどうでしょう。話を仕切ってしまうのは誰でしょうね。

（参加者から：　ガールズ。）

そうなんです。具体的にどんな話をしたかというと、人がたくさん集まって群集になると、まず、たくさんの騒音がして、ざわつきだして、みんな歩くから歩く音もすると。人がたくさんいるから、身をすぼめるようにしてくっつき合って歩くと。みんな、そうやって肩を寄せ合って歩きな

がら話したり叫んだりしていると。人によっては、左へ行く者、右に行く者、あるいは上に登っていく者、丘を越えてみんなでわっと歩いていくグループもあるかもしれないし……。

今のは女の子のグループが話していた内容なんですね。たくさん人がいて、女の人もいるし、いいにおいもするし、それから、女の子たちは短いスカートをはいていたり、それから、ズボンをはいていたり、それから、パンプスを履いていたり、ハイヒールを履いていたり、かわいい格好をしていたりするんだけれども、男の子はそうでもないと。かわいい格好はしていないと。

次は男の子たちでありますけれども、自分の家の近くにもたくさんの人が集まっていて、その中に僕も紛れ込んでいたと。ほんとうにたくさん人がいたので、もう全く何も見えなくて、どこにいるのかもわからなくなってしまって迷子になってしまいそうで、それは危なかったと。それから、ジャケットを着ている人もいるし、セーターを着ている人もいるし、それから、汗をかいている人もいるし、結構においもきつかったと。

それから、これはまた男の子ですが、回りにたくさん人がいて、人の後ろも、横も、前からも見ることができたと。でも前にいる人たちは後ろ姿しか見えないと。それから、たくさん人がいて、紛れ込んでいるんだけれども、お母さんか、あるいはお父さんが自分をつかまえてくれて、お父さんは肩の上に乗せてくれると。そうしてくれると、周りの人の頭がたくさん見えたよと。夜であると群集というのはほんとうに怖いと。それから、ティーンエージャーのグループは黒い服が好きだから、みんな黒い服を着たがると。

そういう例ですね。ですから、このときのプロジェクトの出だしというのは、まずはみんなで夏の体験の話をしようということだったんですね。そこから子どもたちの言葉を引き出してきて、その中で子どもたちが興味を持っていたのがクラウド、群集だということがわかったんですね。その群集に関して、では、絵を描いてもらおうということになったんです。実際に絵を描いたのがこの写真というか、スライドですね。

こういうふうに絵を描いてもらったんですね。ほかにも絵はあるんですが、どれもちょっとお人形さんの絵みたいな感じですね。これを見て、大人の側がどんなふうに言ったかというと、自分たちが群集に関して見た内容は、その内容がこれにあらわれているのかなと、自分たちが見た群集というのはこの絵のとおりだったかなというふうに聞いてみたんですね。

それで、子どもたちは、それに対して、いや、実際のところ、こんなふうじゃなかったと、違ったよと、みんな同じ方向に歩いていったわけでもないしというふうな反応だったんですね。そしてさらにプロジェクトを進めていきました。その中での子どもたちの対話がここに書いてあるんです。

これは、子どもたちが実際にそのときに話していた内容ですね。どんな作業をここで具体的にしているのか、ちょっと写真で見にくいんですが、子どもたちのディスカッションの内容だけとってみると、後ろから見たところも描かないと、あるいはつくらないといけないし、それから、横からのところもちゃんと表現しないといけないし、それから、前からのもきちんと表現しないといけないと。でも、後ろから見たところなんてどうやってつくったらいいのかわからないよと。それで、確かに僕もわからないと。じゃ、それをどうやってやったらいいのか学んでみないといけないねというような話ですね。真ん中のところで、僕は目が見えないわけじゃないから、だから、後ろから見たらどんなふうに見えるのかというのはわかるんだけれども、でも、後ろから見たところをどうやって描いたらいいのか、やったことがないからわからないんだと。それから、横からのところだってわからないだろうと。横からのところだって、やっぱりどうやったらうまく描けるのか、あるいはつくることができるのか、まず理解しないとできないよねと、そんな会話をしていますね。わからないでそのままやっちゃうとモンスターみたいになっちゃうからねと。

この女の子がここまでの会話を聞いていて、私もアイデアがあるのと、横から見たところをどうやって表現したらいいのかわからないと言ったけれども、でも、それはやっぱり練習しなきゃねと。一度やってみて、それからまたやってみて、それからもう一遍やってみて、そうやって学ばないとだめでしょうと。そうしたら、ドミニコという子がこれに答えて、そうだよねと、やっぱりそうしなきゃだめだよねと。そうしないと、だって、これは一体どんな群集なんだってみんなに非難されちゃうぞと。

それで、どういうことにたどり着いたかというと、真ん中に1人子どもが立って、向こう側を北とすると、向こうが北側で、こちらが南側で、それぞれ横から見たところをドローイングで描いて、今度は東側と西のほうでは、粘土でつくってみるというふうにしているんですね。

このディスカッションは非常に興味深くて、横顔を担当している子どもたちが、自分の側から見えない向こう側の目は一体どうしたらいいんだというような話になりますね。でも、東側と西側に座っている子どもたちは、粘土でつくっている、つまり、三次元だから、面に関してはそんなに問題にならないんですね。三次元だから、当然目は2つつけるわけなんです。

先ほど申し上げたように、先生方は、最初、ビーチに行こうと、ビーチプロジェクトをしようという考えだったんですね。だけれども、ポイントは、ここで子どもたちが実は群集に興味を持っているということにディスカッションから気づいて、子どもたちの意見を中心に考えてクラウドプロジェクトにしていったということです。

このクラウドプロジェクトも長い間進行したわけでありますけれども、スライドの一番上にあったのはデッサンであったし、それから、ワイヤを使ったものもありました。それから、一番下にあったのはサッカーのゲームをしているところですね。やっぱり選手がいろんな向きから捉えられていると。

これは、また絵で描いてもらったところなんですけれども、最初の群集の絵はみんな同じ方向を向いていましたけれども、今回は違いました。目が描かれていない人たちもいた、すなわち、向こう側を向いて向こうのほうに進んでいるんですね。

男の子たちは、結局、粘土で群集をつくるという作業にその後とりかかりました。女の子たちは紙でつくることになりました。男の子たちの作業のやり方というのは非常に興味深くて、自動車の組み立て工場のような流れ作業方式というか、そういうやり方でやったんですね。

次の写真も多分男の子だと思うんですが……。これは男の子たち、5歳の子たちがつくったものなんですね。最初は粘土を100体つくろうと考えていたんですね。だけど、残念ながら50ぐらいつくったところで疲れちゃいました。どうしたかというと、100体にするために後ろに鏡を置いたんですね。

女の子たちのほうは、ユニークな点は会話という要素を取り入れたかったんですね。そこで、この群集の上、紙でつくってみんな立っていますが、その上に吹き出しのようなものが出ていますね。会話をしているんです。

このように、最初に子どもたちが作ったものは、再び作りなおされ、よりよいものになっていく、この考え方を「再考」（Revisitinng）と言いますが、それは、ゆっくり時間をかけて、より深い理解を生じさせるような価値をもっています。

教師としての成長

このレッジョ・エミリアですけれども、先ほどの創設者のマラグッツィさんはもう既に亡くなっているわけです。彼の後を継いで、今この教育を率いているのがカルラ・リナルディさんという方ですけれども、彼女の言葉をここで引用したいと思います。こういうふうに始まります。レッジョ・エミリアの考え方というのは、これはただ単に伝統的なこれまでの教え方や教育法というものを変えればいいという単純なものではない。そう

ではなくて、子どもたちの学びのプロセスに合わせて、それに基づいて我々教師が、教える側が教え方を学ぶプロセスなんだということですね。この考え方の中には、先生方というのは継続的に常に自分の教師としてのスキルを伸ばしていくものだというふうに考えて、こういうふうにして子どもたちが人生の意味の探究者であるのと同様に、先生方は学びということの研究者になるのであると。この考え方というのは、一般的に受け入れられている、すなわち子どもというのはかわいくてか弱い存在だという、そういう見方からのパラダイムシフトを要求するものになると。すなわち、かわいい、あるいはか弱いという子どもではなくて、子どもは非常に能力のすぐれたものであるという、そういう子どものイメージ、そういうパラダイムへの変化を求める教育法なんだということです。

英語で文献を読まれるという方にはぜひご紹介したいんですが、私のウエブサイトでありますけれども、そこにいけば私が最近書いた一番新しい本の中身を見ることができます。第 1 章から始まってずっと続いていきますけれども、最初の 8 章というのは子どものイメージ、子ども像ということに関するものであります。これはローラのお話が書かれてくる部分になりますけれども、その次の 8 章というのは、これはドキュメンテーションに関する話になっています。

このドキュメンテーションというのは、先ほどお話しした靴を使った測定の、寸法のはかり方のプロジェクトも載っていまして、こうした情報が現在ウエブ上でも見られるのは、そもそも先生方、プロジェクトに携わった方がドキュメンテーション、記録として残してくれたからなんですね。このドキュメンテーションというのは、もちろん子どもたちに見せるという目的もあり、それから、親たちに見せるという目的もあったし、あるいはコミュニティーの方に紹介するという目的もあったわけなんです。これも重要な点でして、コミュニティーがさまざまな資金面での支援をしてくださっているものですから、そうした方にやっている内容を知っていただくという意味でのドキュメンテーションというのは、ほんとうに役に立っています。

レッジョの先生方というのはいつもリサーチをしています。研究をしているわけなんですね。すなわち自分の行っている内容がどうもうまくいっていない、あるいは十分でないというふうに考えれば、リサーチをして、何がうまくいっていないのかをよく検討して、その改善策というか、よりよい教え方というのを計画して、そして、それを実行していく、こういう形で常に常にリサーチをしてよりよくしていくということ、これが彼らの言うリサーチというものの定義でありますけれども、これは一般的に科学者が考えているリサーチとも基本的には同じものだと考えています。そうした形で、子どもたちの成長をよりよくサポートできるようにしているわけなんです。

また一つ引用したいと思いますが、これはリサ・バーガンという方が言っていることなんですけれども、すなわち、プロの先生として能力を伸ばすということ、あるいは子どもが人格を発達させるということ、これがどういうことかというと、これは今あるあり方から別の型に合わせて別のあり方に変えるという、そういうことではないのだと言っています。そうではなくて、人格の発達であるとか、あるいは教師としての能力、スキルの発達というのは、これは自分の考え方というのを変えて、そして、別のあり方に自分を育て上げていくということだというふうに考えています。

先生方というのは、レッジョ・エミリアのプロジェクトの中で子どもたちと一緒にプロジェクトを進めていくわけです。その中である非常に興味深いことが生じるんですね。それは何かというと、これまで忘れていたけれども教えることを再び愛するようになることです。もちろん子どものことはいつも好きだったけれども、しかし、教えることの楽しさというのは忘れてしまっていた。ところが、このプロジェクトを子どもたちと進めていくことで、再び教えることを愛するようにな

るのです。

子どもの成長を予期し励まし、変化を歓迎する

それから、もう一つ、ここで申し上げたいことがありますけれども、それは何かというと、子どもたちというのは、今よりさらなる先のステージにどんどんと成長していくものなんです。そういう存在だと考えてください。まず、私たちが乳児に対して話をするときに、彼らがまだ日本語も、あるいは英語も理解しないのはわかっていても、それでも彼らに自分たちの言葉で話しかけるのは、こうした子どもたちがいずれ言葉というものを身につけていくのを後押しするために話しかけるわけですね。それと同じことがほかの言葉に関しても言えます。100の言葉でありますけれども、我々は非常にまだ幼い子どもたち、すなわち、とても表現などということを正確にはできないような子どもたちに対しても絵を描いたり、あるいは粘土細工をしたりということを求めるんですね。そして、その中で、例えば、自分がつくりたいもの、小鳥であるとか、花であるとか、興味を引くものをどんどん描いたり、つくることを推奨していくんですね。そうすれば、子どもたちはいずれそうした能力を身につけていきます。

もう一つ、先生として重要なことは、子どもたちが何に興味を持っているのか、あるいは何に引きつけられているかということを知るためには、教師である私たちは、子どもたちの前でパフォーマンスをすることをやめて、彼らの行動を研究することを始めなければならないということです。もしパフォーマンスをやめて、子どもたちの行動をよく理解するためにしっかりと観察するなら、子どもたちが何に関心をもっているのか分かるでしょう。

そして、子どもたちの写真を撮り続けていく中で、自分にとって非常に興味深いことがだんだんと明確になってきます。そういう作業の中で、実際に自分がこれは子どもたちにとって興味深いだろうと思ったことが、ほんとうに子どもたちの目から見て興味深いのかどうかというのを確認していくことだってできるわけですね。

それでは、このあたりで私からのレクチャーは終わりにしたいと思うわけですが、最後に、実際にレッジョのやり方を私がアメリカのほうで伝えて教えてきた、私の学生の言葉を紹介したいと思います。

彼女に、自分が教え手として能力を発達させる上でどんなことが経験として役に立ったのかと聞いたところ、こんな答えが返ってきました。「何が自分にとって重要だったかというと、子どもが何らかの心の葛藤を通してあるとき得た成果を、次の機会に、その子どもがまた厳しい経験をしているときに、役立てられるように手助けしてあげた経験です。それがとても大事で、それが自分の教師としての成長にも役立ったんです。」

具体的にどういうことかというと、ウイラーという子どもさんがいたみたいなんですが、この先生は、ウイラーが新しい難しい何かを乗り越えなければいけない事態に直面しているときに、こう言ったようです。すなわち、ウイラー、覚えているでしょう、あなたが以前1等をとれなくて非常に悔しい思いをしたときに、その自分の気持ちに正面から向き合って、そのおかげで、今ではダフネに1等を譲るようにだってできるじゃない。今あなたが頑張っているのも、それと同じことなのよ。私があなたを助けて手伝うから、いずれまた今の難しいものもきちんと自分で解決がつくわよというふうに、そういうふうに以前の苦しい経験を生かすというやり方を学ぶんだそうです。

こんなふうに、皆さんも、子どもとともに教師としての自分を成長させていっていただきたいと思います。

※一部、文章の意味をわかりやくするために、講演メモに基づいて、コーディネーターの責任で言葉を補足した。